キリスト教の葬式を考える」は、私の尊敬する先輩が、超教派の牧師たちの集まりで発表したものです。許可を得て掲載します。先輩の文章はゴチック体で書かれています。その間に加えられた明朝体文章は、先輩の文章に刺激された私、佐々木が書き加えたものです。

２００８年８月１０日
西九州伝道所
佐々木正明

※

（なお、佐々木が書いた日本の文化と伝道に関する文書をもっと読んでみたいとお思いの方は、ネットで検索して見つけてください。最初に、http://japanesechristian.seesaa.net/ で検索してくださるか、「クリスチャンとして日本で生きる」で検索してくだされば、私のブログに入れます。また、そこから「私のページ」を用いて、私の他のブログに移ることが出来ます。また、ブログは書き入れた日時順で読みにくいとおっしゃる方は、ご一報ください。CDなどの方法で差し上げます。）

連絡先は、missionofg1@gmail.com　もしくは、電話0956－69－3240　住所857-0413　佐世保市小佐々町楠泊1822　です。

キリスト教の葬式を考える

２００８年７月１４日
熊本教役者会
熊本聖書教会牧師　長澤忠雄

■はじめに

葬儀の問題を取り扱うには、民俗学、宗教史、宗教学的な角度、さらに、死後の世界の存在等にふれるべきである。しかし、今回は、牧会の上で常に悶着の原因になっている、「神礼拝と死者儀礼の混同」を取り上げた後、葬儀の具体的なことに絞って考察したい。

葬儀の問題が、牧会の上で常に悶着の原因になってきたのは、何も日本だけに限られたことではあり

ません。キリスト教が入って来る以前から、人々は自分たちの方法で葬儀を行ってきました。それは絶対に必要なことで、大切な社会的機能を果たして来たのです。それが後から「闖入」してきたキリスト教によって、「罪」として糾弾されたのですから、悶着が起こらない方が不思議です。

Ｉ・基本的な考え方

Ａ・神礼拝と死者儀礼の混同

１・死者を悼むのは全人類共通

死者を悼む心は、宗教・無宗教を問わず、全人類共通のものである。人々は神への礼拝と死者への慰霊とを明確に区別している。通常の死者儀礼は神への崇拝ではなく、人間に対する尊敬の延長線上にある。外形的には神への礼拝と同じだが、生きていた人間に対する敬意の表明としてなされるものと思われる。ここが肝心である。これまで教会では「表敬」と「礼拝」を混同して、「偶像礼拝」にあたるとしてきた。

どこの民族でも、葬儀はふつう宗教的な色彩を帯びています。皆目見当がつかない死後の問題を突きつけられるのが葬儀ですから、勢い、宗教的にならざるを得ないわけです。聖書は神以外のものを礼拝することを禁じているために、多くのクリスチャンたちは、宗教的色彩を帯びた葬儀は宗教であり、それに関わることは偶像礼拝であると、一刀両断のもと断罪してしまうのです

ここに、二つの大きな問題が横たわっています。ひとつは、キリスト教以外の宗教は罪かということです。はたしてキリスト教以外の宗教は罪、つまり、神さまが忌み嫌われることなのでしょうか。聖書はそのように教えているのでしょうか。伝統的に福音的なキリスト教では、異教はすべて罪であると断じて来たのですが、そこには、キリスト教化された欧米的な感覚がないでしょうか。欧米的な神学が先行し、聖書の教えを理解し損ねているのではないでしょうか。

聖書に戻って考えてみましょう。それがもっとも大切なことです。人間は、神に似せて造られています。霊である神に似せて造られ、霊である神を感知し、霊である神とコミュニケーションが取れるように、語らうことができるように造られているのです。それは私たちの神が三位一体と言われる神であり、はじめから交わりの神、愛の神として存在してこられたからであり、人間はその愛の発展の表現、愛の対象として造られているからです。ですから、人間が神と交わりを持とうとするのは極めて基本的な本能です。人間はまさに祈る動物であり、祈らないではおれない動物なのです。

その人間としての基本的本能は、罪による人間の堕落によっても失われませんでした。人間は神を怖

がるようになりながらも、神を礼拝し、語りかけることを止めませんでした。神のみ前から追放されて世代を重ねるごとに、人間の中にある神知識はぼやけ、薄れ、変形して行きました。しかし、神に語りかける本能、神を畏れる本能、神を礼拝する本能は、決してなくならなかったのです。それが多くの宗教を作り上げる原因となってきたわけです。

もしもこの神を礼拝する本能が消えてしまって、無宗教になり、唯物主義のように無神論となったならば、偶像礼拝の罪はなかったのでしょうか。筆者の見解では、唯物主義とその社会的経済的帰結である唯物共産主義は、まさに宗教であり、偶像礼拝そのものでした。それはともかくとして、聖書は、救われていない人々のこの宗教的本能を前提として、話を進めているのです。この本能がなければ、伝道もほとんど成り立たなくなってしまいます。私たちは、人間の中に残っている神意識、本能的な宗教感覚を前提とし、それに訴え、それに語りかけることによって伝道を可能としているのです。崩れかけ、ゆがみ、かすんだ神意識、誤りと不確実さに満ちた神意識ですが、それを橋渡し、仲介、あるいは媒体として、始めて伝道が可能になるのです。それを罪と断じるのは愚かなことです。

たとえば、私たちクリスチャンは今、「神」という言葉を何のわだかまりもなく使っていますが、もともとこれは、日本人の宗教感覚から生まれた言葉で、聖書の言葉ではありません。いわば借り物です。聖書の中の「神」を意味する言葉もまた、当時のメソポタミヤ文明の宗教感覚から発生した言葉で、聖書はそれを借用したのです。そうしなければ、言おうとする概念が伝わらなかったからです。でも、それはメソポタミヤ文明の神の感覚、神理解を聖書の中に持ち込んでしまうことにもなりました。そこで神は、「私はあるというものである」と自己紹介をし、長い年月をかけて教育しておられるのです。日本語の「神」も聖書が教える「神」とは程遠い「神」です。そのギャップを埋めるために、正しい神の概念、神の定義を教え続けなければならないわけです。

日本の宗教を徹底して毛嫌いする欧米宣教師型キリスト教は、毛嫌いするあまり、「坊主憎けりゃ袈裟までも」になっています。他の宗教行事に参加することはもちろん、他の宗教の用語をはじめ、他の宗教の概念から発生した言葉までも使わないように指導している牧師もいるほどです。その牧師がどうして、「神さま」と祈ることができるのか実に不思議です。

赤ちゃんには、おっぱいに吸い付いて乳を飲む本能が備わっています。たとえ間違って指に吸い付いても、お父さんのおっぱいに吸い付いても、しかりつけずに、お母さんのおっぱいを与えれば良いのです。もしも赤ちゃんにおっぱいに吸い付く本能が備わっていなければ、どのようにして赤ちゃんを育てたらよいのでしょう。人間には神を礼拝する本能、宗教的本能があるのです。

聖書が「ある」とおっしゃる神以外の神を礼拝することを禁じているのは、イスラエル人だけに限定された命令でした。いわゆる十戒が与えられたとき、イスラエルはすでに、「ある」とおっしゃる神の数々の救いの体験を重ねてきていました。エジプトでの10の奇跡。そして紅海の渡海、火の柱と雲の柱。さらに、荒野での水と食べ物などです。だから、十戒の直前に、私はあなた方を救った神、奴隷の地から導き上った神であるという言葉があるのです。私はあなたを救った。だから、あなたは私だけを礼拝しなさいというのです。このときから、「ある」とおっしゃる神以外の神を礼拝することは、イスラエル人にとっては罪となりました。

ところが、それは神の奇跡を体験していなかった異邦人にまで、適用されるものではなかったのです。聖書を読む限り、異邦人が「ある」とおっしゃる神以外の神を礼拝しているために、「罪を犯している」と断じられることはありませんでした。せいぜい、揶揄され、あざけられているだけです。私たちの神は実

に忍耐深く寛容な神です。なにやら分からない神を礼拝していたアブラハムを、その礼拝態度の良さの故か、神は導き出し、ご自分を現してくださいました。しかし、アブラハムの生活には、それまでの異教的感覚が残っていましたし、彼の子や孫たちの生活にも異教的感覚がたくさんありました。ヤコブが自分たちの宿営から偶像を一掃して、一種の宗教改革をするまでに（創世記35：1～4）、およそ、150年も費やしているのです。日本の宣教が今年で150年になるということですが、それと同じ期間を、神はお選びになった人々の宗教感覚が研ぎ澄まされるように、じっとお待ちになったのです。律法をお与えになる前の神は、それほど寛容だったのです。人々は、まだ決定的な意味で神の救いを経験しておらず、神も決定的な意味で、ご自分を啓示しておられなかったためです。

キリスト教信者たちが、自分たちの宗教以外を罪として糾弾するのは、このような明らかな聖書の記述を理解していない誤りです。パウロ先生は、偶像だらけのアテネで宣教を行ったとき、「偶像礼拝の罪人たちよ」と、日本に来た西欧の宣教師たちのような態度をとらず、あるいはアテネを支配している地域霊と戦って追い出そうともせず、「あなた方が知らないで拝んでいる神を教えてあげよう」と語ったのです。パウロの言葉を理解すると、・・・・揚げ足取りではなく・・・・異邦人たちは、まことの神を拝んでいる可能性だってあるのです。ただ、知らないで、無知のままで、間違った神のイメージをもって、間違った方法で礼拝しているのです。それは、人間の罪による堕落の結果ではありますが、聖書は、それ自体を罪と断じてはいないのです。

第二の大きな問題は、次の項で取り扱います。

２・仏教と先祖祭儀

親鸞は生前の信仰の在り方を大切にし、死者のための供養を否定したと言われている。しかし今日では、祖先儀礼とは無縁だった仏教が、「葬式宗教」と言われるほどになっている。葬式をするのが問題なのではなく、また先祖を大切にするのが問題なのでもなく、それしかしなくなったお寺が多くなったのが問題なのである。

確かに今の仏教は「葬式宗教」に成り下がっていると言われています。しかし、その葬式宗教、あるいは死者にのみ関わっていると思われている仏教が、日本社会においては非常に大切な社会的機能を果たしていることも事実です。葬式が行われなければ、社会は成り立たないだけではありません。日本の親族関係・血族関係の絆を確認し、強めているのが仏教なのです。神道は氏神や鎮守の祭り、あるいはそこから発展した地域の祭りなどで、地域社会の絆を確認させますが、仏教は仏教行事で、親族や血族の関係を再確認させているのです。葬式をはじめとした仏教の行事に集まった人たちの間では、「あらっ！　あの方もうちの親戚だったの！？」などという声が、しばしば聞かれるのです。神道の儀式も仏教の儀式も、自分自身が誰かということを確認させることによって、つまり、アイデンティフィケーションを持たせることによって、日本人の心の健康を保っているのです。自分がどこの馬の骨かわからない人間ではなく、地域社会に属し、親族・血族の中にいる一人であるという、帰属意識を持つことができ、安

心することができるのです。

ただし、このような仏教の役割は、仏教本来の役割ではなく、たまたまそのような重要な機能を果たしてきたというだけのことであり、本来生者の宗教だったはずの仏教が死者のための宗教になり下がり、本来生きている者のためであったお経が、死んだ者への弔いになっているのは情けないことに違いありません。

３・忘れ去られた祖先祭儀

よくても悪くても、先祖を大事にして暮らしているのが私たちの国である。この国にキリスト教、殊にプロテスタントは、既成教派ごとに宣教師を派遣し、福音の純粋さを競って来た。そのために、神道や仏教を背景にした日本の先祖祭儀を弾劾する傾向にあった。聖書は、神以外のものを礼拝することを禁じている。だから、死者の霊魂を礼拝してはならない。ただし、死者への愛慕、尊敬、遺徳を偲ぶこと等は禁じられていない。どうすべきであるかは、簡単ではないが、牧師はこの問題に対処する方法を確立しなければならない。

情熱と熱心さを持って日本にやってきた宣教師たちの多くは、純真な信仰の持ち主で、ピューリタン的な聖さの強調を特徴としていました。特に、新興国として力を発揮しつつあったアメリカから来た宣教師たちは、自分たちの信仰的純粋さだけではなく、自分たちの生活習慣をも誇りとして来たのです。自分たちの経済力、自分たちの進んだ文明を、福音を語る背後の誇りとしていたのです。それでいながら、彼らは自分たちの文化的・文明的誇りを、信仰の確信、あるいは誇りと切り離して考えることはできませんでした。自分たちの考え方、生き方、習慣、あるいはしきたりや文化が、キリスト教的であると信じて疑わず、信仰そのものと混同して不思議に思わなかったのです。それは、文明がまだ発達していなかった地域の伝道においては、大いに有効だった場合もたくさんあります。

そのような人々が日本に来て、日本の不思議な習慣や伝統を見、たちまちそれらを蔑んだのは当然です。文化というものに造詣をもつ、わずかの者たちを除いては、多くの宣教師たちは日本の文化を、非キリスト教的、反キリスト教的とみなし、これを糾弾したのです。そして、日本の文化にあまりなじまないで生活してきた、たとえば筆者のような人間、あるいは、日本の文化を敵視してきた人間、あるいは西欧文化にあこがれていたような少数の日本人は、クリスチャンになることができましたが、自分たちの文化に安んじ、それを誇りとして来た大部分の日本人は、そのような西欧式キリスト教に躓いてきたのです。

キリスト教はその地域独自の強い文化、あるいは文明を持つ地域では、宣教の困難に遭遇してきました。仏教国、ヒンズー教国、あるいはイスラム教国では、伸び悩んでいるのです。日本を仏教国とするか神道の国とするかは難しい問題ですが、独自の強い文明、あるいは文化を持っていることは明らか

です。多くの日本人はそれを誇りとし、よりどころとし、そこに自分のアイデンティティ見出して生きているのです。

ここで、先ほど言い残してきた、第二の大きな問題に触れましょう。それは死者に対する敬意、あるいは尊敬の表現と、礼拝との違いです。西欧の宣教師たち、あるいは西欧の宣教師の伝えた福音でクリスチャンとなり、西欧式キリスト教の教育を受けた日本人牧師たちは、日本式の死者への哀悼、あるいは敬意の表現を、偶像礼拝として糾弾してきました。確かに日本の葬儀は日本の宗教で行われます。キリスト教がなかったのですから当たり前です。当然、キリスト教ではない宗教の匂いが付きまといます。だからといって、死者に対する悲しみの吐露、哀悼の表現が、即、偶像礼拝なのでしょうか。

アメリカでもイギリスでも、他のキリスト教国のどこでも、彼らの葬式には死者に対する哀悼、悲しみ、尊敬などの表現が見られます。当然のことです。その表現の多くは、外見的には神への礼拝とあまり変わりません。男は帽子を脱ぎ、頭を垂れ、手を胸に当てます。それを棺の前でやっても、偶像礼拝だと非難する人はどこにもいません。ところが、同じことを日本の仏式の葬儀で、棺の前でやると偶像礼拝になるらしいのです。おかしいではありませんか。

死者に対する尊敬は、ふつうそのひとが生きていたときに、そのひとに抱いていた尊敬の延長にすぎません。もちろん日本においては、どんなに悪人だったとしても死という厳粛な事実に遭遇した者に対しては、同じく生まれまた死に行くものとして、一定の尊敬を払うのです。とにかく、その尊敬の払い方が日本においては仏教的な表現でされ、西欧ではキリスト教的な表現でされるだけのことです。一般に仏教式の葬儀の参列者には、明確な死生観がありません。死者に意識があるのかないのかも良くわかりません。死後の命があるのかもわかりません。死者に私たちの言葉が聞こえているのかもわかりません。わからないけれど、参列者は死者への思いを吐露し、語りかけ、訴え、涙するのです。

Ｂ・死者供養と死者祭祀

１・死者供養と死者祭祀の区別

死者祭祀は死者を力あるものとしてまつり、死者供養は、苦しみ迷う死者の冥福を祈る。本当はこちら（生身の人間）の方が、励ましや慰めを必要としているが、現世の生身の人間が死者を慰めるのであるから、死者との関係としては生身の人間が上である。しかし、死者祭祀は、死者を力あるものとしているので、死者のほうが上であるといえる。（この問題だけを教役者会で取り上げて、意見交換の機会を得たいものである。）

死者祭祀は、一般に死者を神としてまつる神道的な行事です。仏教的な言い方にも、「死んだらみんな仏になる」というのがあります。通俗仏教ではなく、しっかりとした仏教の教えにそのようなものがあるのかどうかは、無学な筆者は知りませんが、何となく、神道の死者祭祀の影響があるように感じます。靖

国神社に祀られた英霊はみな神になっていると聞きました。仏教徒であろうがキリスト教徒であろうが、お構いなしに神となっているというのですから、日本人の神道も仏教も非常におおらかです。もしもクリスチャンが神とされたことになっている死者を、「神」として認めて祈るならば、それは偶像礼拝になるでしょう。しかし、たとえ死者は神になっているという神道的感覚の場でさえも、そこで頭を垂れて礼拝する人々は、死者を神と認めている場合は少ないことでしょう。それはタテマエにすぎません。ホンネはむしろ、死者に対する尊敬の気持ち、あるいは敬意の表現として行っているのです。ましてやクリスチャンが、死者を神として拝むなどということはあり得ません。

死者の供養は仏教的な感覚で、弔いがあり、弔い合戦などという言葉もありました。ただしこれは、必ずしも仏教に限ったものでもありません。カトリックでは煉獄という考えがありますから、免罪符などという究極の供養があるわけです。ただカトリックの場合は、功徳が直接自動的に死者に行くわけではなく、一旦神に受け止められ、それが死者に送られるわけですから、仏教と同じではありません。福音的な聖書の理解では、通常、死者と生者との境には、人間には超えられない溝があって、そこの行き来も交信も不可能であるということになっていますので、供養も不可能です。ですから、供養は異教的習慣であり、偶像礼拝だとなるのです。筆者には、異教的習慣がすぐに偶像礼拝とされることが不思議でならないのですが、多くの牧師たちはそのように教えているようです。また、カトリック的に考えると、たとえ、煉獄の思想は受け入れなくても、罪人のままで死んだ人のために悲しみ、「神さま、私の命と引き換えに、罪のままに死んだ母に、あわれみを与えてください」と祈ることはできるのではないでしょうか。たとえそれはできないと知っていても、そのように叫びたくなるのは心情ではないでしょうか。そのように叫ぶことが罪なのでしょうか。

聖書をしっかりと読み直していくと、福音的教会が教えていること、つまり、死者と生者との間には越えられない溝があるという教えが、必ずしもそうでないことにも気付きます。キリストの語られた金持ちとラザロの話では、裁きにあっているものが、生者に接触することはできないようですが、旧約聖書には、サムエルが霊媒者によって死の世界から呼び戻された話が記されています。福音派の人々の多くはこの物語を嫌い、何とかごまかして説明することが多いようですが、やはりこれは聖書が記している通りに、事実であると理解するのが素直な方法です。

ただ、聖書が明確に記していない事柄を断定的に語って、そこから神学を作り上げるのはよくないことですから、死者との交信とか交わりについて、あまり多くを語ることはできません。大切なのは霊媒や口寄せや占いの類が聖書で禁じられている事実です。あるいは、一般的には、死者は現世に戻ったり、生者と交流したりすることはできないように定められているのですが、どこかに抜け道があって、霊媒者などがそれを知って利用しているのかもしれません。だから神は、それを禁じられたと考えることも可能でしょう。霊媒や口寄せなどはまったくの迷信で、悪霊のまやかしだから神が禁じられたのだと言う人もあります。確かに多くの場合はそうでしょう。ただすべてそうだと言い切るには、サムエルの物語が強力な反論となってしまいます。ただ、死者の領域に関しては、私たちが知らなくてもよいことなのでしょう。だから、聖書は多くを語っていないのです。ちょうど、天地創造の物語が私たちの知的欲求を満足させるためには記されていないのと同じです。私たちは、なぜ恐竜のことが記されていないのか、なぜ太陽が造られる前に昼と夜があったのかいろいろと想像することはできますが、聖書が明確に教えていない以上、断定はできないのです。

そうそう、ほとんど忘れかけていましたが、新約聖書には、当時の教会が死者のための供養と同じような考えを持っていたらしいことを示す、事実が記されています。パウロはコリントの教会に、「死者のためにバプテスマを受ける人たちは、何のためにそうするのですか」と語りかけたのです。もちろん、死者の

ためのバプテスマということについて、聖書が触れているのはただこの一箇所だけですから、いま、ここから死者のための洗礼を正当化する神学を作ることは間違いです。でもパウロは、死者のバプテスマを良いとも悪いとも言っておらず、それを勧めも禁止もしていません。ただ、復活という大きな議論の中で、たまたまその事実に触れただけなのです。したがって、聖書のさまざまな記述を総合して考えて、つまり神学的に考えて、死者のための洗礼は正しい福音理解に根ざしていないと結論づけられます。ただし当時のコリントの人々が、このパウロの言葉をもって、自分たちが行っていた死者のための洗礼を、正当化することも可能だったと知らなければなりません。

ともあれ、パウロが死者のための洗礼という間違った儀式を、厳しく糾弾してはいないということは事実なのです。たぶん、取り扱っている復活という大切な議論からして、そのときはあまり大きな問題と感じなかったのでしょう。でも、コリントという異邦人社会の異邦人的考えが、具体的な形をとって教会に忍び込んできていたのですから、パウロは、厳しく禁止することもできたはずです。「正しい福音理解から外れてまでも、あなた方が死者のためにバプテスマ受けているのは、どうしてですか」と言えばよかったのです。ところが彼は、私たちの敬愛する宣教師や牧師のように、「偶像礼拝だ！！」といきり立つこともなく、目くじらをたてて禁止しようともしていないのです。そこが重大なのです。徹底したパリサイ派の教育を受けたパウロは、偶像礼拝については厳しい見解を持っていました。教会の中に危険な哲学や習慣が入り込むことに、常に危機感を抱いていました。しかし、死者の供養と同じ感覚の、死者のための洗礼には声を荒立てなかったのです。

２・ 仏教と神道の役割分担？

日本人は死者を供養する部分は仏教を利用し、死者祭祀の部分は、神道（靖国神社等）を利用してきた。祖先祭祀や死者祭祀は、カミとなって子孫を守り、部落や村を守る祖先や死者を礼拝するのである。死者供養の対象は、苦しみ迷うといわれる死者である。単にこの死者に手を合わせ、頭を下げる行為が、ただちに死者礼拝に当たるとは言えない。他に色々と整理すべきこともあるが、今回は葬儀にしぼることにする。

一般的な日本人は、神道の死者祭祀だろうと仏教の供養であろうと、死者が何らかの形で生きているという、曖昧模糊とした期待と気休めから、同じような気持ちで行っています。神道、仏教という区別さえ、一般的日本人にはありません。あるのは死者に対する礼儀、死者に対する尊敬や感謝などの情の表現なのです。仏教式で死者に通じるならばそれでよし、神道式で死者が喜ぶならばそれもよしです。

日本人は感謝をするときも謝るときも頭を下げます。礼拝するときも、ふつうは頭を下げます。それも、相手に気付かれていようといまいと、お構いなしに行われることがしばしばです。大恩人の後姿に深々と礼をする姿は、とても日本人的です。「助さん格さん。では参ろうか」と去っていく水戸のご老公の後ろで、助けられた人が涙ながらにお辞儀をするのが受けるのです。これは気持ちの表現であって、お辞儀されている人が気付こうが気付くまいが、関係はないのです。そこに、日本人らしい律儀さがあります。

もっとも、他の民族にはないといっているのではありませんが。

このようなお辞儀を、偶像礼拝だと非難するクリスチャンはいないようですが、死者に礼をする気持ちとどこが違うのでしょう。有り難うございますと声に出して言ってはならないのでしょうか。観念論的な日本人の感覚を理解しなければなりません。キリスト教文化の西欧にだって、類似の感覚はあるはずです。部屋に飾られていた亡き祖父母の写真を粗末に扱った引越し業者が、ものすごい剣幕で叱られたという話を聞いたことがあります。写真は写真に過ぎません。しかし、そこにはそれを飾っている人間の気持ちが付着しているのです。これは偶像でしょうか。死者の行方については曖昧な感覚しか持っていない日本人が、遺影に語りかけることは、はたして、それだけで罪なのでしょうか。

Ⅱ・具体的な葬儀について

Ａ・葬儀は伝道の場だろうか

１・伝道に心を奪われてはならない

先輩から「葬式は伝道の場である」と聞かされたものである。たしかに、まごころのこもった葬儀が行なわれ、具体的な葬りを通してイエス・キリストの福音が伝えられた時、葬式が良い伝道の場となることは長い牧会のなかで経験して来た。ただしそれは結果であり、目的ではないことを知らなければならない。

２・日本の文化や人間性を理解する

葬儀の最後に「バンサイ」と、大声をあげた司式者の話しを聞いたことがある。天国へ凱碇したのだからと言う素朴な信仰の表現であろうが、人の心情を配慮しない、キリスト教的ひとりよがりの言動は問題である。肉親でない司式者が、遺族の心情を無視する言動は厳につつしむべきである。弔問者の拒否反応を引き起こすだけである。

内村鑑三が愛娘のルツ子の葬式で、「ルツ子万歳」と叫んだという話は、本当かどうか知りませんがよく知られています。でもそれは自分の娘で、自分が喪主であり葬式の司式者です。事情がまったく違います。たとえ亡くなったのはクリスチャンであったとしても、クリスチャンではない家族や親族の心を察知し、痛みを分け合わなければなりません。そして、そこにはなお希望があることを語るのです。葬式の目的は伝道ではありませんが、死について真剣に考えるこのときは、もっとも良い伝道の機会であることに疑いはありません。

Ｂ・キリスト教葬儀で、従来問題とされている点

１・葬式、葬儀、告別式の区別の問題

長藤山妙善寺住職石田達峰氏は、「葬儀とは、故人の成仏を祈り葬る儀式であり、告別式とは・故人の霊に対して、縁故、知人が最後の別れを告げる儀式であります」と語っている。

著名なキリスト教神学校で実践神学を教えておられるO氏は、「『告別式』というと、あたかも遺骸が故人そのものであるかのような誤解を招きやすい。『葬儀』は他家の場合の敬称として用いられることもあり、自家の場合は、『葬式』とするのが普通です」と述べている。

筆者は日本の儀式には無知であると思いますが、告別式だろうが、葬儀だろうが、葬式だろうが構わないではないかと思うのです。要するに死者を送る儀式であり、死者に別れを告げる儀式なのです。遺骸が故人そのものであると誤解されようと、大きな問題ではありません。ただし、そのような誤解をする人は、日本人にはまずいないことでしょう。たとえ遺骸に取りすがって泣いたとしても、遺骸を故人だとは思っていないのです。ですから葬儀だろうと葬式だろうと告別式だろうと、筆者にはなんの変わりもありません。儀式は儀式であって、事実を象徴するに過ぎません。死者にはすでに別れさせられているのです。死者はすでに送られているのです。死者はすでに死んでいるのです。それを悼む心、悲しむ心、懐かしむ心がそこで表現される一方、慰めといたわりと励ましも表現されるのです。

２・故人の写真（遺影）と飾る位置の問題

日本の宗教や文化とキリスト教の関わりについて、さまざまな発言をしているK氏は、「飾らないほうが賢明だと思いますが、遺族や親族の強い要望がある場合は、玄関近くに飾る程度がよいでしょう」と書いている。

またクリスチャンと葬儀の問題を論じたC氏は、「中央に設けられますと、礼拝の対象のように誤解されやすいので、せめて写真の位置は横にずらす方が無難」と記している。二氏の忠告に従うも良し、正面に飾るも良しである。ただ肝要なのは、「死者儀礼」と「死者礼拝」を混同しないことである。単に死者に手を合わせ死者に頭を下げる行為が、死者礼拝になるわけではない。問題は遺族がどう希望するかである。

「遺影を飾らないほうがいい」とか、「玄関近くに飾る程度がいい」などというのは、筆者にはばかばか

しくて話にもならない感覚です。「中央に設けられると、礼拝の対象のように誤解されやすいので、せめて写真の位置は横にずらした方が無難」などというのも、何が無難なのかさっぱり分かりません。それほど、誤解されたくないのでしょうか。つまり、誤解を恐れるのは、本来キリスト教でもそのようにしても構わないのだけれど、そうすると、間違った理解をされて、福音がゆがんで届いたり、教会が間違ったイメージで受け止められたりするからということです。おかしな感覚です。福音も教会も、もっと重要な多くの点で誤解されています。今さらその程度の誤解を恐れてどうだというのでしょう。先に述べたように、遺骸を故人と誤解することがふつうの日本人にはありえないのと同じくらい、遺影を礼拝の対象と考える日本人も、まずいないことでしょう。むしろ、遺影を飾らない方が、あるいは横にずらして飾る方が、大きな誤解を生むでしょう。キリスト教は死者を大切にしないと。‥‥この誤解はもう誤解ではなく、事実になっているでしょうか。それは、日本を始めとして、死者を大切にする文化では大変な躓きです。むしろ遺影は堂々と真ん中に飾り、同じようにする仏教的日本人との、大切な接点とすべきです。

３・「献花」か「飾花」かの問題

前述のK氏は「控えた方がよい」と明確に述べている。O氏は、「死者礼拝に通ずるような響きをもっているから」献花ではなく「飾花」にしなさい、それも「故人」ではなく、故人の「遺骸」を飾るとおっしゃっている。ああ!　何と言う始末だろう。C氏も、「献げる」のではなく、「祭壇を飾る」のであると述べている。私も若いころは、先輩の忠告に忠実に従って　「飾花」だと指導してきた。しかし、もし献花をするならば、「飾花」などと言い訳しないで、確信をもって「献花」をすべきである。「献花」が偶像礼拝や死者礼拝につながるとは、到底思えない。(ローマ14:23)

話がこのあたりまで来ると、ばかばかしいというより、嘆かわしいというほかありません。死者に花を贈っても、文化を理解しない宣教師と西欧ボケした牧師やクリスチャン以外には、死者礼拝だと思う人はいません。死者がその花を実際に受け取り、美しさに喜び、匂いに慰められるかどうかは別の問題です。これは生きている者の心の問題であって、誰も、死者のことを問おうとしてはいないのです。死者に対する心の表現を理解しないキリスト教は、少なくても筆者は嫌いです。ささげるのではなく祭壇を飾るとおっしゃる方に伺いたいものです。そもそもなぜ飾らなければならないのですかと。死者に尊敬の念を持たず、哀悼の思いを抱かないならば、飾る必要もありません。それとも単に、参列者の手前、飾っているのでしょうか。いまやマスメディアが発達して、西欧諸国の葬式の場面も、しばしば目にします、たくさんの花が飾られ、遺影が飾られ、献花もされています。戦争でなくなった兵士のために、国はラッパを吹かせ、墓を飾らせ、たくさんの花をささげさせます。誰のためにしているのでしょう。死者の家族を慰めるためでしょうか。そうではなく、やはり死者のためにしているのです。それで、家族も慰められるのです。

４・「遺族礼拝」か 「死者儀礼」かの問題

C氏は、「神以外の存在を礼拝対象とする」ことは聖書で禁じられているのだから、「…遺骸を礼拝せぬように配慮しつつ…・」と語っている。結構な配慮だが、死者に対して頭をさげる、あるいは手を合わせることが、死者を神格化することになるのだろうか。キリスト者のだれが、故人を礼拝しようとして、頭を深くさげるだろうか。

挨拶は歴史的、文化的(宗教的)背景に影響されている。東南アジアでは、生きた人間に手を合わせて挨拶をする。柔道の試合の作法を除いて、欧米等では握手や抱擁で挨拶をする。死者を抱擁するのも、死者と握手するのもお断りだが、死者に礼を尽くして手を合わせたり、頭を下げたりする「死者儀礼」は偶像礼拝ではあり得ない。

クリスチャンは、神以外のものを礼拝することを拒否します。でも、頭を下げることは礼拝と同じではありません。手を合わせることが礼拝になるのでもありません。南方仏教の強い国では、人の頭には仏が宿ると考えます。ですから、知らずに子供の頭を撫でようとすると、とんでもない怒りにぶつかります。彼らは互いに仏が宿っているもの同士と認めて、合掌し合うのです。タイやベトナムやカンボジア、あるいはミャンマーのクリスチャンも、おなじように合掌で挨拶をします。筆者は、東南アジアの牧師たちとの会議の合間に、質問したことがあります。「あなたたちの国の理解では、挨拶のために合掌することは、仏を礼拝することにもなりますが、クリスチャンの間ではそれは偶像礼拝であると禁じられるようなことはないのですか？」 あまりにもばかばかしい質問だったのでしょう。一笑にふされてしまいました。かの日本人の牧師ならば、間違いなく偶像礼拝だと叫ぶでしょう。いろいろと尋ねる筆者に、彼らの一人が答えてくださいました。「私たちが合掌することによって、偶像礼拝をしていると非難されるよりも、合掌しないことによって、私たちが他人を軽蔑していると非難される方がもっと大きな問題です」

５・弔辞の問題

O氏は、「弔辞者が棺、または遺骨に向かって、あたかも、そこに故人の霊魂がとどまっているかのように、『〇〇君。思えば君は、・・・』と、始めてしまわないように‥‥指導しないと故人礼拝になってしまいます」と、「慶弔辞典」の中で書いている。

故人に語りかけるのではなく、遺族に向かって 「弔辞」を述べるのはよい。しかし、だれかが故人に向かい弔辞を述べたとしても、「死者礼拝」になるとは考えられない。夫に先立たれた未亡人が、箪笥の上の小さな写真に向かって、「今日の牧師の説教良かったわ」とポツリと呟いたからと言って、「死者礼拝」になるのだろうか。

弔電については、「故人の社会的地位を紹介する意味はあるにせよ、時間をさいて会葬した人よりも欠席した人の方を重んじるようで好ましくない‥‥ごく一部のみを代表的に読む程度がよい」という、C氏の意見は傾聴に値する。

日本の習慣では、弔辞者は、死者に向かって語ります。ところがキリスト教の葬儀では、誰かが死者へ向かって弔辞を語ることを、恐ろしく嫌い恐れます。なぜそんなに忌み嫌うのでしょう。死者に語りかけることがそれほど罪深いことでしょうか。死者に語りかけることは確かに不確実です。死者に聞こえるか聞こえないかわからないからです。仏式でやっている方たちだって、必ず聞こえると思ってやっていることはまれです。あくまでも、自分の心を吐露しているのです。そしてその心情が死者に伝わり、慰めになればと、淡い期待を持つだけなのです。それがそれほど悪いことであるとは、筆者には思えません。筆者は水戸黄門の後ろ姿に深々とお辞儀をする人間の姿に、「いいなあ」と思う、マンネリズムの日本人だからです。

ダビデは死んだ親不孝の息子、アブサロムに向かって語り続けました。悲痛な叫びを上げ続けました。それがどれほどの期間続いたのかは明らかではありませんが、ダビデの性格からすると、1時間や2時間の突発的なものではなさそうです。彼は死者に語る恐ろしい罪を犯したのでしょうか。死んだご主人を思い出して、そっと語りかける年老いた未亡人は、罪を犯しているのでしょうか。「おまえ、今日も1日がんばるよ」と、死んだ妻に毎朝かたりかけて一日を始める老人を、神様はお怒りになるのでしょうか。彼らの理解は間違っているかも知れません。その表現も正しくないかもしれません。でも、神は心をご覧になるのです。愛し合うことを大切になさる神が、かたわれが死んだからと言って、愛することを止めるように要求したり、愛の表現をしないようにと要求したりすると考えるのは、ばかげています。

ところで、ここで私の先輩は、どこかの牧師がお書きになったらしい「慶弔辞典」なるものに触れておられるのですが、不思議なことです。クリスチャンに「弔」、すなわち「とむらい」というのがあると、お考えなのでしょうか。筆者の日本語にはかなり怪しいところがありますが、もし、間違っていなければ、弔いとは、死者を慰めることです。悔やみであり供養をすることです。弔辞とは死者のために、死者を慰め、供養するための言葉のはずです。その弔辞を許しておいて、死者に語りかけてはならない、参列者に語りかけるのはよいというのでは、意味不明、ツジツマが合いません。

６・百人いれば百人の対応

新約聖書的（旧約聖書的ではなく）キリスト教には、絶対的なものと相対的なものが共存する。両者を見誤ると混乱が生じる。絶対的なものとしては、偶像礼拝に関する禁止命令がある。相対的なものに弔辞の仕方、花を飾る位置、棺の位置、写真の有無、合掌の有無などがある。これらについて、聖書には具体的なことが述べられていない。

ここで先輩が絶対的という表現で語っておられるのは、普遍的な教えであり、相対的といわれているものは、地域や時間に制約される文化に適応した教えと言えるでしょう。厳密には偶像礼拝を禁止する教えも、完全に普遍的ということはできません。あくまでも罪を犯した人間を対象としているという背景があり、さらに、神の救いを経験した者という前提があるからです。まだ罪を犯していない人間に与えられた、普遍的なものではないのです。また、罪を犯したすべての人間というのではなく、神の救いを体験したすべての人間なのです。

とにかく、偶像礼拝をしてはならないというのは、すべての人間に与えられたものではなく、神の救いを体験したすべての者に与えられたものであるということを、改めて確認しなおさなければなりません。十戒が与えられた背景と、十戒の前提条件となる出エジプト記20章の1、2節を、しっかりと理解する必要があります。もちろん、神はすべての人間が偶像礼拝をやめ、ご自分だけを礼拝することを望んでおられます。しかし、それにはまず神の救いを体験し、「神を知る」ことが前提条件になるのです。偶像禁止を声高に叫び、神の怒りを宣言するよりも、神の救いの福音を語り、神の悲願である救いを伝えることが先決なのです。そのために大切なことは、必要もない躓きを作り出さないことです。

ともあれ偶像礼拝禁止の教えは、神の救いを体験したものには普遍的な戒めです。時間を超え、場所を超え、民族や国家や言語や習慣という文化を超えて有効な絶対命令です。それに対して、弔辞の仕方、花を飾る位置、棺の位置、写真の有無、合掌の有無などは、絶対的命令を文化的な状況に適応させていく相対的な事柄です。聖書にはそれらに対する明快な言及はありません。あくまでも適応なのです。ですから、弔辞が偶像礼拝になるならば、絶対に行ってはなりません。花を飾る位置によって偶像礼拝になるならば、どんなことがあろうとそれを避けなければなりません。棺の位置も、写真の有無も、合掌の有無も、偶像礼拝になるならば断固として拒絶します。ただし現在の日本の文化では、どう考えてもこれらのことが偶像礼拝になるとは考えられません。とはいえ弔辞だけは、筆者は勧めることができません。教会で行われる葬儀において誰かが間違って死者に語りかけ、慰め、弔いをしたとしても、筆者はクリスチャンとしてゆるすことができます。しかし、教会の葬儀で弔辞をプログラムに加えるのは・・・・いかがかと思います。それに変わるものを準備したほうが良いと思います。

7・他の対応に対する寛容

信仰の基礎は一つ（コリント第一8:4)だが、築かれた信仰は様々である。そして信仰は成長する。確かによい葬式があるはずである。しかし、「これ以外は間違いである」と言える葬式があるのだろうか。この対応以外は許されないと言えるほど明確なものがあるのだろうか。

たとえ、そのような「完全な葬儀」を行い、葬儀に対して完璧なキリスト者としての対応ができたとしても、愛がないならばいかほどのものだろうか。クリスマス、イースター等に異教的なものを取り入れながら、他の葬儀に対する対応を批判できるのだろうか。多様な対応の仕方を認める寛容さが必要である。謙虚になりたいものである。

一般にキリスト教の行事と思われているものには、たくさんの非キリスト教的なものが含まれています。たとえば、日曜日は主の甦りを記念した日であるから、クリスチャンはその日に礼拝会を行うなどという説明は、後代の理屈です。日曜日は主の甦りを記念して創設された日ではありません。太陽神を礼拝した日です。だから「日」なのです。英語でもドイツ語でも、「太陽の日」です。キリスト教が発祥したころ、主の甦りを記念して礼拝会が行われたとすると、それは現在の日曜日ではなく、土曜日の夜であったはずです。その当時の安息日は今の金曜日の日暮れから、次の日の夕暮れまでだったからです。今の日曜日は当時の通常の労働日であり、そのような日中に、大勢のものが仕事を休んで礼拝会ができるはずがないのです。日曜日が礼拝の日となったのは、太陽神をあがめる日曜日が休日とされた、コンスタンチヌス帝の時代です。

クリスマスが主の誕生日だというのも、正しくありません。実際、キリストの誕生日は不明です。クリスマスを何時にするかで、教会は分裂をした事実があるのです。クリスマスには、たいていの教会でクリスマスツリーを飾りますが、これも本来キリスト教の習慣ではありません。もみの木を神としてあがめていた民族を躓かせずに教化するために、彼らが崇めていた木を教会に持ち込み、これを飾り立てて大切にしたことから始まったのです。

イースターは日本語では復活祭と言われていますが、キリストの復活を祝う、キリスト教で最も大切な行事の一つです。このイースターという名称自体が、本来キリスト教から出たものではなく、異教の神の名前から来たものです。また、多くの西欧的教会がやっているイースターエッグやイースターバニー（うさぎ）も、キリスト教には何の関係もない、異郷の習慣が紛れ込んだものです。

数年前のことですが、NHKの番組で世界の行事のレポートを聞いておりますと、ハロウィンがキリスト教のお祭りだと説明されているのにびっくりしたものです。でもそのうちに、本当にキリスト教のお祭りになるかもしれませんね。あるいは、カトリックではすでに取り入れているのかもしれません。キリスト教の行事や習慣と思われているものには、たくさんの異教的習慣が紛れ込んでいるのです。

確かに私たちは、異教的なものに対してもっと寛容になるべきです。葬式に異教の習慣が入り込まないように躍起になっている方たちは、まず、日曜日の礼拝会を土曜日に移し、クリスマスツリーを排除し、イースターエッグを取りやめ、イースターバニーを追い出すべきです。それをしないでも良いとおっしゃるなら、葬式の異教的習慣にも寛容になるべきです。とくに、キリスト教が入ってくる前に存在していた宗教のやり方に対しては、寛容な態度が必要です。寛容という言葉が存在しない英語を母国語としている人たちの、寛容性の低いキリスト教を見習ってはならないと思うのです。日曜日やクリスマス、あるいはイースターに見られるようなシンクレティズムには警戒しながらも、既存の宗教の行事を再解釈し、クリスチャン信仰に取り入れることも可能だと思うのですが、どうでしょうか。まったく敵視していたのでは、福音を伝達することはできません。まったく同じではなくても、類似の考え方や行事にはもっと積極的取り組み、それを媒体としてコミュニケーションを可能にすることはできないものでしょうか。

たとえば日本には秋祭りという行事があります。さまざまないわれがありますが、基本的には収穫を感謝する祭りです。これは、キリスト教の収穫感謝祭と重ね合わせることができます。すでに、日本でも多くの町々で、収穫感謝祭を行っています。地域共同体が行う秋祭りとは別で、どちらかというといわゆる

と「神抜きのイベント」の感が強いようですが、これなどは、日本の教会がもっと積極的に取り入れて、福音の味付けを加えた上で、地域社会の中に持ち込んで行けるのではないでしょうか。

Ⅲ・異なる宗教行事に参加することの是非

A・キリスト教以外の葬式出席

１・死者儀礼に対する理解

ある人々の間には、仏教式（あるいは異なる宗教）の葬式に参列すること自体、キリスト者としてふさわしくないとの理解がある。K氏は、訪問、電話等で、お悔やみをのべ、葬式後に再び訪問すると述べ、「偶像礼拝」をさけるためであると説明している。「死者儀礼」と「偶像礼拝」の区別、また、「偶像礼拝」についての理解が違うと思われる。あるキリスト教指導者は、異教の葬儀に出るより、色々な葬儀の裏方に徹した方がよいとアドバイスしているが、これも問題がある。葬式の参列は宗教行事に出るではなく、死者の葬りの式に出るのでるである。

同じ地域に住む人の葬式に参列しないのは、非常に失礼なことです。親族の葬式に参列しないのは、親族であることを拒否することに等しいものです。裏方で働く人も、表で参列する人も、勝手にそうするのではなく、社会や親族関係の中の立場でそうしているのです。それをたがえるのは、社会の秩序や親族関係の秩序をみだすことなのです。和を大切にする日本人が最も嫌うことが、秩序を乱すことです。裏方をどのように一生懸命にやっても、参列すべき立場の人が参列しないことは、死者を軽んじることなのです。そのようなことで参列を逃れるのは、クリスチャンの自己満足であり、まやかしです。葬式は宗教行事に参加するのではなく、死者を葬る式に参加するのです。

K氏は訪問、電話などで、お悔やみをのべ、葬式後に再び訪問するように勧めておられるようですが、これでは、何の解決にもなりません。葬式後、時機を失わないように訪問するなら、そこにはまだ新しい祭壇があり、遺骨があり、遺影があります。仏式の理解では、まだ死者の魂がそのあたりをさまよっているはずです。そこへ、あたらためて訪問して何をするのでしょう。お悔やみを述べ、挨拶をするだけでしょうか。ふつうならば、祭壇に向かい手を合わせ、焼香をするのです。遺族はそれを期待しています。それをしないのは礼を逸しているのです。わざわざ礼を欠くことをするために、訪問するのでしょうか。

２・「村八分」も驚く仕打ち

信仰が異なるので葬式には出ないようにすると言うのは、望みさえすれば社会生活を放棄して、教会という安全地帯に住むことができる、牧師にだけ通用する言い分である。社会にしっかり足をつけて信仰生活をしなければならない信徒には、どこの国の話、どこの社会の話に聞こえるだろう。「愛は礼儀に反することをせず」である。 人間は、死亡すると偶像になるわけではない。生きているときと同様に尊敬すべき人々である。尊敬する人に対する態度と行為は、その人の死後においても変わらないものである。

日本には昔から「村八分」という習慣があった。村といわれる地域社会で、村全体の利害に反したことを行ったものを、あらゆる付き合いから遮断したのである。しかし、「火事」と「葬式」のふたつだけは例外であった。つまり、二分は別であったために、「八分」なのである。同じ地域社会に住んでいたとすると、たとえあらゆる付き合いを止めたとしても、火事が起こったのでは知らない振りはできない。それでは地域社会に対する裏切り行為になってしまう。葬式とても同様であろう。

社会から乖離しても生活して行ける宗教家である牧師は、たとえ葬式に参列しないでも、あまり強い風当たりはありません。だから、葬式には参列しない方が良いなどとノーテンキなことを言うことができるのです。しかし、異教社会のただ中で生きて行かなければならない信徒には、大変な問題です。親や子、兄弟や親戚、あるいは勤務先の社長や上役や同僚が死んだとき、葬式に参列しないのは裏切り行為です。反社会的行為そのものです。それ以後、親子の関係は壊れ、親戚づきあいはできなくなりかねません。実際、そのような例は枚挙にいとまがありません。お隣のおじいさん、お向かいのかみさん、後ろの嫁さんが亡くなったとき、葬儀に参列しないのは隣人であることを否定することです。共に痛み、ともに泣くことを嘲笑うことです。それは文字通りお付き合いの拒絶で、地域社会を無視することです。大都会の新興住宅地で、お隣さんが誰なのか顔も知らない地域ならばまだしも、地方の田舎になると、そのようなことでは絶対に、通常の社会生活はできなくなってしまいます。

それでも、ときどき、一匹狼のようなクリスチャンがいて、あらゆる苦労を乗り越えて葬式に参列しないですんだと、勝利の証をするのです。もともと、西欧的キリスト教を受け入れてやって来ることができたクリスチャンの中には、反社会的であることをものともしない一匹狼、自分の誤った行動に対する批判も反感も嘲笑も、信仰の故の迫害と受け取って気にも留めない独りよがりが多いのです。なるほど、彼は勝利をしたことでしょう。しかしそのために、彼の周囲に住む数十人の人たちは、「絶対にクリスチャンにはならないぞ」と固い決意をしてしまうのです。彼は、仲間うちの反社会的キリスト教の中では英雄かもしれませんが、福音の使者としては失格です。

クリスチャンにならないまま、罪を赦されないまま死んだ人のために、一番悲しみ涙を流すのは、本来、親でも子でも親族でもなく、福音を伝え救いに導くことができなかったクリスチャンのはずです。葬式に出て、棺の前で涙を流しましょう。そして、その場で神に祈りましょう。「神さま。私のいたらなさをお許しください。この人の血の責任の一端は私にあります」と。その姿を見て、参列者がどのように誤解しようと問題ではありません。罪人の死を本当に悲しんでおられるのは神さまです。

B・仏式の葬儀に出席してからの諸問題

１・キリスト者の焼香をめぐって

ほとんどの「教会生活案内」や「入門」「慶弔」関係の著者は、結論として焼香を否定している。これらの著者の方々は、牧会のうえでは、個々のケースについて様々な対応を指導しておられるのだろうか。ただ、公になる文書では、ケース別に具体的な対応について説明する余裕がないために、無難な書き方をされたのかも知れない。私の場合も文章にする場合には、言葉足らずの誤解を避けるために、配慮をしている。

２・焼香の勧めではないが

先の項目で述べたが、「焼香」は偶像礼拝のように「絶対」の部類に属するものではなく、「死者儀礼」の対応のひとつで、「相対」の部類に属するものである。焼香は、多くの指導者が言うように頑なに拒否すべき類のものかと言えば、否である。

実のところ、キリスト者にとって焼香は何の意味も持たないものである。焼香することで、焼香される側の死者も焼香する側の生きている者も、悪影響を受けることなどあり得ない。焼香に反対している方は、ほとんどが人の目にどう映るかで論じている。聖書には「人を恐れるとわなにかかる」(箴29：25)と言われている。日本社会のキリスト教は、いまだに西洋の「異教」である。キリスト教の本質の部分ではなく、周辺のことがらで拒絶されたまま、今日に至っているのである。

ヨブ記3章25節には、「私の最も恐れていたものが、私を襲い、私のおびえたものが、私の身にふりかかったからだ」と記されているが、指導者が恐れたそのおそれが、従う信徒たちの身にふりかかるである。とはいうものの、誤解を受けないようにこの点を説明するには、それだけで原稿用紙２０～３０枚は必要で、一言で明らかにできない歯がゆさがあるのも確かである。

「幽霊の正体見たり枯れ尾花」という川柳があります。恐れると芒まで幽霊に見えるのです。まさにキリスト教信仰の一面です。聞くところによると、最近、悪霊だの死霊だの地域霊だの先祖についていた霊だのを恐れるクリスチャンが多くなっているそうですが、随分たくさんの枯れ尾花です。間違いなく、焼香も枯れ尾花です。

「折れた線香の一本でも、上げてやってくだせえやし」とは、やくざの台詞ですが、やくざも死んだら線香の匂いを好きになるという意味ではありません。私のことも、時には思い出してくださいという意味です。思い出すことを、線香を上げるという行為で表現するのです。やくざの場合は尊敬してもらえないことが分かっているために、「折れた線香の一本でも」なのです。

日本における焼香は、ふつう、亡き人をしのび尊敬と情を示すための行為です。死んだら突然線香の匂いが好きになるのではないでしょう。仏教においても、線香の始まりは死臭を和らげるために用いられていたのが、死者に対する追悼を表すものになったということです。これがなぜキリスト教徒に忌み嫌われるのか、筆者にはまったく理解できません。要するに仏教的だからだめなのでしょう。死者に対する哀悼や追悼は罪だというなら、「西欧的人間」になった日本のクリスチャンたちが模範にする、西欧のクリスチャンたちも同じ罪を犯していることはすでに述べてきた通りです。

ところで、旧約の時代のイスラエルやユダにも、死者のために香を炊く習慣があったことをご存知でしょうか。焼香を忌み嫌う牧師たちが知らないはずはないのですが、まだそのことについて書いているキリスト教の書籍を読んだことがありません。なにかおかしいですね。ちなみにそのうちの一箇所を引用しましょう。「『あなたは安らかに死んで、人々は、あなたの先祖たち、あなたの先にいた王たちのために香をたいたように、あなたのためにも香をたき、ああ主君よと言って、あなたをいたむ。このことを語るのは私だ。』主のみつげ」（エレミヤ34:5）

このエレミヤ書の記述によると、神ご自身がユダの王ゼデキヤに語っておられるのです。「人々はあなたの死を悲しみ、あなたを追悼するために香をたく。他の王たちにしたと同じようにたくさんの香をたく」と。このお言葉には、だからそれを慰めにしなさいという意味がこめられています。また、香をたくことがイスラエルやユダの習慣となっていたことも分かります。さらに香をたくことが、単に死臭を消すだけではなく、哀悼と悲しみ、あるいは尊敬と思慕の表現であったことも分かります。そのために尊敬を勝ち取っていた良い王のためにはたくさんの香がたかれ、嫌われていた王のためには少しの香しかたかれなかったのです。(参照:Ⅱ歴代16:14、21:19）

神はこのようなイスラエルの習慣を、忌むべきものとして、あるいは偶像礼拝として退けてはおられません。かえってそれを、善良な王を慰めるために用いておられるのです。しかも、人々が「ああ。主君よ」といって、死んだ王に語りかけることを許しておられるのです。どうして、宣教師崩れの日本のキリスト教は、焼香を偶像礼拝と同一視して毛嫌いするのでしょう。葬儀の場で死者に語りかけることを禁止するのでしょう。(なお、歴代誌とエレミヤ記で用いられている香をたくという言葉は、イスラエル人が幕屋や神殿で主に向かって炊いた香とは、別の言葉が用いられていますので、明らかに、神殿祭儀の香とは別の香、あるいは別の意味の香だったと理解されます。） 日本のクリスチャンたちは、そろそろアメリカをはじめとする西欧キリスト教の植民地的感覚を棄てて、自分で聖書を読み、自分で理解する能力をつけなければならないと思うものです。

３・愛からくる自由の制限だけが制限

コリント第一の手紙8章を学ぶならば、「焼香」が偶像礼拝でないことは明らかである。偶像礼拝になりようがない。第一、故人が偶像になるはずがない。しかし、キリスト教の指導者は､焼香が偶像礼拝だと恐れている｡「死者に対する儀礼」があるだけなのだが････。

その焼香が信仰の弱い人、 偶像礼拝になると信じる人を苦しめるのであれば、弱い人に対する愛からくる自由の制限で、焼香をしない方がよいと言うことになるだけである。私は、牧師なので、どのような葬式に出席しても焼香の必要を感じないが、キリスト者としての自分の信仰と確信に基づく方法と態度で、故人に敬意をあらわしている。

焼香をすることによって人を躓かせるとしたら、躓くのはおかしな日本のクリスチャンか、聖書を読み損ねたまま彼らを指導している牧師です。彼らも「弱い人」ですから、彼らを躓かせないように心がけるのは良いことです。ただ、たまたま無理をして仏式の葬式に参列していた、彼らのことを考慮して焼香をしなかったとすると、彼らは、いつまでも焼香をしないことが正しいと思い違いをし、一般の人々の間に、さらに反キリスト教的感情を蔓延させていくことになります。この場合、間違っているクリスチャンを躓かせない方がいいのか、一般の人々を躓かせないようにすべきなのか、選択は容易ではありません。

一度教えられて信じてしまった教えを、後から間違っていたからといって、考え方を変えてもらうのは至難の業です。だから、たとえ聖書がどういおうと、焼香をしないクリスチャンはこれからも存続し続けるでしょう。筆者は焼香すべきかどうか、どちらを選択すべきか断定することができません。ケースバイケースだと思います。ただ、クリスチャンがその場にいない場合、あるいはその場にいるのが牧師という、いくらか強いクリスチャンであるはずの人であったならば、筆者はクリスチャンとして、また牧師として、お悔やみの表現として積極的に焼香をします。焼香するのが当然で当たり前なのです。牧師が躓いたとしても、赦してもらいましょう。

5　※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※ ※

この文章に啓発されたからといって、教職の方は、簡単に自分の教会でこれを採用しないでください。自分の中で、検証し、熟成させてから、信徒と良く話し合って下さい。先輩牧師の言うことを全て信じるのではなく、常に考え、人を恐れずに、委ねられている信徒を守ってください。特に、他の教職を恐れないでください。日本の中で「異教」扱いに甘んずることなく、日本の文化を愛するキリスト者を養い育てください。

たくさんの牧師や信徒が、この問題を真剣に考え、論じ合って欲しいものです。枯れ尾花クリスチャンをなくして欲しいと、心から願います。

参考資料

１．まごころのこもった葬儀・・・・・千代崎秀雄　　いのちのことば社
２．死と葬儀・・・・日本基督教団　信仰職制委員会　　日本基督教団
３．キリスト教慶弔辞典・・・・小畑進　　いのちのことば社
４．日本の宗教行事にどう対処するか・・・・勝本正實　　いのちのことば社
５．日本人の生活習慣とキリスト教・・・・勝本正實　　いのちのことば社
６．異教としてのキリスト教からの脱出・・・・桜井圀郎　　いのちのことば社

７．異教世界のキリスト教・・・・桜井圀郎　　いのちのことば社
８．この国で伝道を・・・・木谷信三　　いのちのことば社
９．信仰生活ハンドブック・・・・片岡伸光監修　　いのちのことば社
10．キリストと世界１３号．１４号　　いのちのことば社
11．キリスト教葬儀・・・・疋田博司　　イーグレープ
12．この国で主に従う・・・・井戸垣彰　　いのちのことば社
13．キリスト教葬儀・・・・水野健　　いのちのことば社
14．心に残るキリスト教のお葬式とは・・・・井上彰三　　新教出版社

※　私の願いは、極端な言い方をすれば、四、五冊の「葬式の手引書」から、キリスト者を解放することである。

筆者の願いは、欧米キリスト教の植民地のような日本のキリスト教が、しっかりと聖書の教えに根ざした、大人のキリスト教に成長することです。文化の問題に敏感なのは一般牧師よりも宣教師たちです。最近の欧米の宣教師たちの中には、筆者のような文化理解、あるいは聖書理解を正しいと認める人が多くなっています。ところが日本の教職の中には、まだ、宣教師経験者は少なく、現地の文化と直接接するタイプの宣教師はさらに少ないために、文化の問題に疎く、むかし、欧米の宣教師に教えられたことを鵜呑みにして、それを忠実に継承している方々が大半なのです。

日本の文化を敵視するのではなく、正当に評価してこそ、効果的な宣教ができ、健全な信徒を育てることができるはずです。